

[原 著]

幼児教育におけるダンス・表現活動の導入に関する研究

—リズムダンスを手がかりにして—

亀山 有希*

(2007年10月29日受付, 2008年3月6日受理)

Research Concerning the Introduction of Dance and Movement of Expression into Early Childhood Education

—In the Context of Rhythmic Dance—

Yuki KAMEYAMA

This research focused on children aged between five and six years, and observed their approach and efforts towards dance through the practice of rhythmic dance. The result of this research allowed the specific characteristics of rhythmic dance to be highlighted, and also provided opportunity to examine any key points from rhythmic dance to movement of expression; the main purpose of this research.

The results illuminated six main characteristics of rhythmic dance, as summarized below. Rhythmic dance allows for;

1. Relaxation of both the heart and body.
2. Enjoyment of dance through the feeling of rhythm.
3. Ease of development of movement for children.
4. Ease to extract an image through movement, or alternatively ease of movement through the extraction of an image.
5. Enjoyment of dance as a form of communication with others (friends) throughout the shared space of dance.
6. Extraction of an idiosyncratic mode of expression for each individual.

From the aforementioned results, it can be considered that rhythmic dance is a valid and effective means to extract individual expression throughout childhood; a formative stage of growth involving great linguistic, intellectual and physical development. It can therefore be concluded that rhythmic dance and movement of expression are directly related, and that through a systematic placement within a formal learning system, increasing such experiences enables children to cultivate an innate ability to express themselves through physical movement.

Key words: rhythmic dance, movement of expression, dance supervision, early childhood education

キーワード: リズムダンス, 表現活動, ダンス指導, 幼児教育

1. はじめに

近年、子どもを取り巻く環境は日々変化し、少子化や子どもの心、からだ、遊びについての問題が指摘され、とりわけ「子どもの生活から『仲間と群れて行う運動遊び』が減少し、そのことが、体力や運動能力の低下のみならず、こころとからだのアンバランスを生み出し、さらにはコミュニケーション能力の低下」¹⁾に

もつながっている。

正木²⁾は『子どものからだと心白書 2006』³⁾の報告から、子どもの体力と運動能力の変化に焦点をあて、「体力診断テスト (1964~1997年)」⁴⁾「新体力テスト (1998~2005年)」⁵⁾のテスト結果の平均値は横ばい(低下していない)傾向が見られるが、これに対し「運動能力テストの合計点の平均値の年次推移 (1964~

* 社会教育学研究室

1997年)⁵⁾では1980年頃から低下傾向が見られるという点に注目している。そして、体力と運動能力について「『体力』は《からだのものと力》です。専門用語では、『行動体力』と言っています。この《『からだ』のものと力》を『運動の場面』で外に出した結果を『運動能力』と言っています。」と定義したうえで、「最近の子どもは、『行動体力』が維持されている」のですが、「その力を『運動の場面』で出す方法が分からない」ということなのです(中略)。ですから、「力を出す気にさせる」ことと「力が出し方が分かるようにする」ことが、今の子どもたちに必要なのだ!²⁾と運動能力を育むことの重要性について述べている。

言葉が発達段階にある幼児期において、運動能力を育む教材の一つとして表現活動・ダンスが挙げられるが、高野⁶⁾は幼児期の身体活動・表現活動について、「からだを媒体とした表現活動は、言葉の未発達な幼児期には最も直接的に自己表現できる活動であり、自己概念の核となる身体概念の形成に役立つ」とし、また、西⁷⁾は「子どもは、こころとからだをいっぱい使う表現遊びが大好きです。表現遊びには、想像する楽しさや表現する楽しさがあふれているからです。」と論じている。これらの先行研究が示すように、幼児期の運動能力や表現能力を育む題材に表現活動・ダンスが教材として取り上げられる一方で、導入の難しさを訴える声も少なくない。上月⁸⁾は「身体で表現することが大好きな子どもたちも、やがて、身体で表現すること、動くことに抵抗を示すときがくる」と指摘し、それは例えば『側転』ができないという自分の身体(の状態)に気づいたときに起きる現象と結論づけている。このような現象は体育やスポーツの場面でも起こるが、とかく表現活動をする際に多く見られる現象といえる。高野・小田の研究報告⁹⁾では、幼児への創造的身体表現の指導法をその指導特性の違いから「動き遊び」と「変身遊び」に分けて取り上げている。「動き遊び」とは、「こんな動きできるかな」と、まず、動きを楽しく体験させ、「そんな動きはどんなイメージかな」とイメージ想起を図る身体表現活動のことであり、「変身遊び」とは、表現題材をまず、イメージして動く「～になろう」という模倣表現のことであり、創造的身体表現にも「動きからイメージを引き出す」方法と「イメージから動きを引き出す」方法があることは明白だが、上月が指摘する「やがて、身体で表現す

ること、動くことに抵抗を示すときがくる」現象は特に後者の「変身遊び(イメージから動きを引き出す)」の際に起きると想定される。未成熟な幼児期においては、共有できるイメージが限られ、指導者主導での表現対象を提示していく展開になる可能性が高いと考えられるからだ。

そこで本研究では、子どもの発育発達を視座に入れながら、リズムダンス実践を通し、リズムダンスから表現活動への手がかりを探ろうとするものである。「リズムダンス」を「動き遊び=動きを楽しく体験させた後にイメージ想起を図る身体表現活動」の延長と捉え、実践過程の中から表現活動への糸口を検討する。

2. 方 法

(1) 調査対象

1) 〇幼稚園の概要

〇幼稚園は東京都に位置するキリスト教の幼稚園である。「キリスト教の精神に基づき、学校教育法に則り、一人ひとりの幼児が今、最も必要としている援助を与えて、その心身の円満な発達と個性の伸張とその子が「一人でできるように」との教育方針を掲げている。また、保育方針としては以下の4項目が挙げられる。

【保育方針】

- ① 幼い時から神を敬い、人を愛し、生命の尊さを知り、感謝と思いやりの心情を育てる。
- ② 意欲と深い精神性、思考力を養うために、日常生活訓練、感覚教育を重んじて適時適切な援助を惜しまない。
- ③ 健康生活のよい習慣を身に付け、のびのびと明るく、賢くて、健やかな子どもになるよう環境を整え、多くの経験を与える。
- ④ 安全・集団生活の基礎を訓練し、危険から身を守り、自主的でしかも協力の精神を養う。

特に着目したいのは、園の特色として謳っている専門指導にある。表2-1はその内容である。〇幼稚園では運動遊びを教科教育の一環と位置づけ、通常保育の中に運動遊びの展開を図っている。

2) 年長組みのクラス編成ならびに特徴

5歳~6歳児の年長組みは2クラス構成になっており、ひつじ組み(男の子=17名、女の子=18名)、はと組み(男の子=17名、女の子=17名)の合計69名

表2-1 年長保育にみる専門指導の特色

①	〔運動遊び〕	大学体育講師陣による本格的な体育館で、週1回年長児が行う。保育方針や発達段階を意識しながら、運動に関する保育計画をたて年間を通じて運動遊びに親しむ。
②	〔英語〕	外国人教師が、直接本物の発音を聞かせる。週1回全学年クラスごとに行われる。
③	〔顕微鏡観察〕	大学教授陣がわかりやすく指導する。

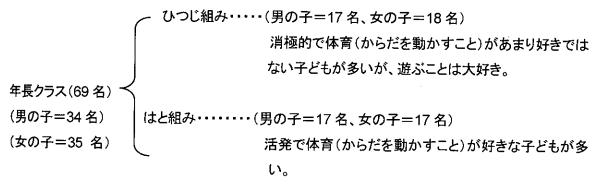


図 2-1 年長組みのクラス編成ならびに園児の特徴

(男の子=34名、女の子=35名)である。ひつじ組みははと組みに比べ運動遊びの活動がやや消極的な傾向にあり、決まりの中でからだを動かすことがあまり得意ではない子どもがやや多いが遊ぶことは大好きである。また、はと組みは日頃から活発で一定のルールの中でもからだを動かすことが好きな子どもが多い傾向が見られる。

3) 方法

①指導観察期間

2007年8月～10月

②指導観察場所

〇幼稚園 附属施設(メインランド、体育館、フットサル場)

③指導内容

筆者自身が指導者となり、リズムダンスを作成し実践指導を行った。

④記録

参与観察ならびにVTR収録を行った。また、園児への簡単なインタビューを行った。

3. 結 果

(1) 〇幼稚園におけるダンス導入の実践について

1) 年長組み年間計画

表 3-1 は〇幼稚園における「年長組み年間計画(運動に関する保育計画)」である。運動・表現指導専門の指導者では、園の保育方針や日頃の園での活動、子どもの発達段階を加味しながら、運動遊びの年間計画を作成した。特に、2学期は1学期の経験を踏まえて、「集団として共通の目的を意識し、クラスの仲間とやり遂げる」ことを目標に掲げ、その取り組みの一つにリズムダンス(運動会での発表)を位置づけた。また、3学期には「子ども同士がお互いを認め合いながら活動する」「共通の目的に向かって、友達と協力する」ことを目的とし、2学期のリズムダンスを受けるかたちで表現活動の単元を設定している。

2) リズムダンスの取り組み

2学期に入り、リズムダンスや運動会の種目であるリレーを中心に指導を行なった。〇幼稚園の運動・表現指導専門の指導者では、過去5年にさかのぼって、年長組みの運動会発表ではマ스ゲーム・リズムダンス3課題を発表している。

本年度のリズムダンスのテーマは「スマイル」である。年長組みの子どもたちの印象を象徴するキーワードを保育者や運動・表現指導専門の指導者と話し合った結果、このテーマにつながった。リズムダンスは、動きの性質の異なるものを組み合わせることを念頭に

表 3-1 年長組みの年間計画(体育カリキュラム)

学 期	I			II			III	
	5月	6月	7月	9月	10月	11月	1月	2月
体育の活動	基本動作 I 基本動作 II、ボール I 鉄棒 I、マット運動 I 鉄棒 II、跳び箱 I			リズムダンス	ボール II トランポリン		表現活動 ボール III まとめ、サーキット	
個人の取り組み	年長としての自覚を育む。 それぞれの場面で、課題に対し乗り越えようとする気持ちを持つ。			課題活動に対し、相談して取り組む。 課題活動に対し、グループで行動できる。			友達と協力して園活動を進められる。 お互いを認め合いながら、活動する。 共通の目的に向かって、友達と協力する。	
小集団としての取り組み	気のあった友達とのつながりを深める。 簡単な課題に、周りの友達と取り組む。			課題活動に対し、友達と相談して取り組む。			お互いを認め合いながら、活動する。 共通の目的に向かって、友達と協力する。	
大きな集団としての取り組み	他のグループに目を向ける、意識する。			共通の目的を意識し、活動する。 共通の目的を意識し、クラスの仲間とやりとげる。			お互い認め合いながら、活動する。 課題に向かって仲間と協力する。	
保育者が意図する活動	合同礼拝 健康診断 年長保育参観 誕生会	避難訓練、田植え 花配り(年長) 合同礼拝、誕生会 年長プラネタリウム	お泊り保育 夕涼み会 誕生会	始業礼拝 年長昆虫観察 バザー 誕生会	運動会 稲刈り 芋掘り 避難訓練	保護者参観(体育) 交通安全教室 年長野菜配り 父と子ふれあい	学園新年礼拝 おもちゃつき 動物村 誕生会	豆まき/さけ放流 年長お別れ遠足 誕生会 写真撮り

表3-2 リズムダンスの概要

No.	楽曲/テーマ	動きの特性	手具
①	それが大事	「バトン」を用いたマスゲーム。「スマイル」の曲線的な動きに対して、直線を意識した身体活動・隊形移動を多く取り入れている。	バトン（サララップの芯をバトンに見立て、棒の先端にすずらんテープを飾ったもの）
②	Let's Go いいことあるさ！！	手具は用いずに、からだで音楽を感じ、リズムに合わせて動く。動きのほかに、声を出すという身体活動も加えた。	なし
③	スマイル	「フラフープ」を用いたリズムダンス。「それが大事」の直線的な動きに対して、曲線をイメージした身体表現・隊形移動を多く取り入れている。	フラフープ

おき、①バトンを用いたマスゲーム「それが大事」、②身体活動やリズム表現をメインにした「Let's Go!! いいことあるさ」、③フラフープを用い曲線的な動きを重視した「スマイル」の3部構成とした。

本項では、筆者が創作し展開したリズムダンス「Let's Go!! いいことあるさ!!」について、その実践経過を追いながら、リズムダンスの原案が導入経過の過程でどう変化し、子どもたちのからだを通してどう形作られていったのかについて検討する。

表3-3 「Let's Go!! いいことあるさ!!」概要は、このリズムダンスのイメージやモチーフ、主からだのどの部分をどのように動かすかなどについてまとめた。


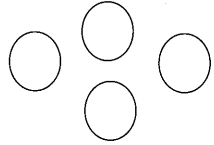
2) リズムダンス「Let's Go!! いいことあるさ」導入経過について

8月上旬に「O幼稚園の年長組み担任2名、補助指導員1名、運動・表現指導専門の指導者3名」にてリズムダンスについての打ち合わせを行い、テーマ・イメージの統一、動きの系統化などを図った。そして、各リズムダンスの担当者を決め、「選曲」「動きづくり」「隊形変化」などについて話し合いを行った。これらの検討会議を踏まえて創作したのが資料の「Let's Go!! いいことあるさ」である。

「Let's Go!! いいことあるさ」では、歌詞の内容からイメージするキーワードをあげ（元気よく、弾む、前向きに、笑顔）、モチーフを創作した。このリズムダンスを通して習得する課題の設定は、①音楽やリズムをからだで感じ、それを表すこと、②からだを叩き音を出すという表現方法を取り入れること、③周囲の友達を感じ合いながら、楽しくダンスを踊ることとした。また、身体の動きと要素については、幼児期の発達段階を意識しながら多様な動きを経験させることを念頭におき、表3-3のような表現要素を盛り込んだ。

8月下旬には担当者間での打ち合わせを行い、その中で各リズムダンスの提案を行った。「5・6歳児の発育発達に適した内容になっているか」「イメージやテーマに沿った動きや構成になっているか」「曲のイ

表3-3 Let's Go!! いいことあるさ

楽曲	Let's Go!! いいことあるさ ボンキッキ		
イメージ	歌詞の内容から浮かぶイメージを抽出 元気よく、弾む、前向きに、笑顔		
モチーフ	「Let's Go Oh!!」という歌詞のイメージから、モチーフを導き出した。		
隊形	4グループ（17～18名）に分かれ、円隊形で踊る  【正面】		
身体活動	身体部位と動きの要素	頭部	上下
		上肢	回す、振る、叩く、屈伸、ポーズ
		体幹	揺らす、捻る
		下肢	ヨコ移動、跳ぶ、屈伸、バランス
全体課題	リズム	音やリズムをからだで感じる	
	音を出す	手を叩く	
	触れ合う	友達の手と自分の手を合わせ、拍手をする	

メージやリズムに沿ったものになっているか」などの観点から動きと隊形・移動、全体の構成を検討し、一部手直しを行った。

表3-4は「Let's Go!! いいことあるさ」の導入経過、表3-5は「Let's Go!! いいことあるさ」の発展経過についてまとめたものである。ここでは、リズムダンスの導入経過を追いながら「Let's Go!! いいことあるさ」の子どもたちの反応や動きの変化について検討する。

「Let's Go!! いいことあるさ」を導入～発表までの流れの中で、子どもたちの反応や動きの変化に重点を置き整理をしたところ、指導段階は①導入期、②練習期、③葛藤期、④変化期、⑤発表期の5段階に分類できることが明らかとなった。

まず「第1段階：導入期」であるが、リズムや動きに慣れる時期と設定し、8月下旬の夏期保育、9月からの園での生活の中で音楽「Let's Go!! いいことあるさ」をBGMとして流すところから始めた。子どもた

表3-4 「Let's Go!! いいことあるさ」導入経過

時期	指導者・保育者の活動	「Let's Go!!」における子どもたちの反応・変化
8月上旬	「まわりの友達を感じながら、自分のからだを動かす楽しさやダンスを踊るよるこび、からだからあふれ出るリズムを体感する」ことを目的としてリズムダンスを創作する。 保育者・指導者のイメージの統一化、テーマ決め、役割分担などを決める。 各リズムダンスのイメージの統一化を図った。 プログラムシートの作成(資料参照)	
8月下旬	リズムダンス(案)を創作し、保育者・指導者に提案を行なった。 イメージの再統一化。動きの手直し。	
9月上旬	夏期保育や9月からの園内活動の中で「Let's Go!! いいことあるさ」の音楽をかけ、日常生活の中で曲に対するイメージを膨らませ、リズムを浸透させていく。 ◆動きの意味やイメージを伝える。 ◆子どもたちにダンスの動きを伝える。	
9月体育授業①	「スマイル」の練習	大まかな動きを捉え、「まね」をする。
体育授業②	「Let's GO!! いいことあるさ!!」動きの確認。円隊形で初めて踊る。	⇒周りをきよきよりする。 ⇒左右が分からなくなることがある。
運動会の練習	「Let's GO!! いいことあるさ!!」グラウンドにて練習を行なう。日頃の遊びの中に「Let's Go!!」を取り入れたことが動きの習得に繋がった。	⇒からだにリズムや動きが浸透し始める。 ⇒踊りながら「Oh!!」の掛け声が出るようになる。
体育授業③	「それが大事」動きの写しリズムダンス通し練習	⇒笑顔で踊ることができる。 ⇒「Oh!!」の掛け声がより一層大きくなる。 ⇒ジャンプの変化
体育授業④	「それが大事」「スマイル」移動練習	⇒周囲の友達を感じながら踊ることができる
運動会・総練習	全体練習	

ちは「この歌、知ってるよ」「これで運動会踊るの?」「ちょっと(リズムが)速そう」「もっと違うのがいい」などとそれぞれの感覚で曲に興味・関心を示した。これと同時に、保育者からポーズやモチーフなどの動きを遊びの中に取り入れてもらい、少しずつ動きに慣れ・覚えることから始めた。

次に「第2段階：練習期」は、動きをからだで覚える時期と設定し、「導入期」の約1週間を経て、「Let's Go!! いいことあるさ」の歌詞の意味と動きの意味を子どもたちに伝え、「まね」を中心として実際の動きだしに入った。特に、この段階では子どもたちが各動作をイメージしやすい言葉に変換しことばがけを行った。

「第3段階：葛藤期」では、声かけをほとんど控え、実際の隊形で音楽にあわせて踊る段階に入った。自分の感覚や記憶をたどる、もしくは、隣の友達を見て動くといった現象が見られ始めたのがこの時期であり、動きの習得にも個人差が出てくるようになった。円隊形ということもあり、動きに集中できない、周りの友達が気になりきよきよするといった傾向が見られた。前段階である練習期と比較すると、運動量や動きの覚えはぐっと低下する傾向が見られた。

「第4段階：変化期」に入るとほとんどの子どもが動きを習得した。「覚えている」という自信・もしくは

安心感からなのか、からだの動かし方、表情などに余裕が見られ始めた。具体的な変化としては、①からだの緊張がとける、②歌詞を自分のことばで理解する、③動き方に種類があることを覚える、④からだにリズムが浸透し始める(リズムにからだは反応する)、⑤自分の動きがでてくる、⑥歌詞を自分のことばで理解する、⑦子ども同士で教え合う、少人数で動いてみる(例：どちらが高くジャンプできるかなど)⑧子どもたちの動きに対する発言が増えてくるなどが挙げられる。

「第5段階：発表期」はこれまでの練習の成果を発表する段階である。リズムを感じながら動きもダイナミックになり、かけ声をみんなで合わせ、なかには歌を口ずさみながらリズムダンスに取り組む子どもも出現した。また、周りの友達を感じながらもしくは意識しながらダンスを踊ることができる、自然な笑顔で踊ることができるなど、表現方法に差異が見られるようになった。

導入時と発表時の子どもたちの反応や変化を比較し整理すると、以下の点において変化が見られた。

- ①からだの緊張がとける(自然な笑顔が出始める)
 - ②自信を持って動くことができる
 - ③動き方に種類(強弱、高低、速い遅いなど)があることを覚える
 - ④からだにリズムが浸透し始める(リズムにからだは反応する、リズムと動きがシンクロする)
 - ⑤自分の動きが出てくる
 - ⑥歌詞を自分のことばで理解する(動きのイメージ化につながる)
 - ⑦歌詞を口ずさむ(歌を歌いながら踊る、Ohのところ「オー」の掛け声を出す)
 - ⑧子ども同士で教え合う、少人数で動いてみる(例：どちらが高くジャンプできるかなど)
 - ⑨動きに対して、子どもたちの発言が増えてくる(手のきらきらの動きはお星さまみたにするなど)
- また、導入時と発表時のリズムダンスを比較すると、以下の点において変化が見られた。

【身体活動】

振り付けとしての動きを習得した後はからだの緊張がとけ、自然な笑顔が増え、動きがダイナミックになった。また、動作とリズムがシンクロし、からだでリズムをとりながら動くことが可能となり(一部できない園児もいた)動作に特徴が顕著に表れるようになった。そして、さらには自分のからだの動かし方が出るようになった。

【表現】

歌を歌いながら踊る、みんなで声を合わせてOhのところ「オー」の掛け声を出すようになるなど、想

表 3-5 「Let's Go!! いいことあるさ」発展経過

発展段階	取り組み	声かけ	子どもたちの反応・変化/作品の変化
【導入期】	<p>リズムや動きに慣れる時期</p> <p>8月下旬の夏期保育、9月からの園での生活の中で音楽「Let's Go!! いいことあるさ」をBGMとして流すところから始める。</p> <p>同時に、保育者からポーズやモチーフなどの動きを遊びの中に取り入れてもらい、少しずつ動きに慣れ・覚えることにも取り組み始める。</p>	<p>【動きに対する声かけ】</p> <p>「先生のまねできるかな?」「このポーズ何に見える?」など</p> <p>【子どもに対する声かけ】</p> <p>興味関心をもってもらうため、ダンスや音楽に対する質問を増やし、声かけを行なう。</p>	<p>【子どもたちの反応・変化】</p> <p>曲に興味・関心、反応を示す。</p> <p>「この歌、知ってるよ」「これで運動会踊るの?」「ちょっと(リズムが)速そう」「もっと違うのがいい」など</p> <p>【作品の変化】</p> <p>「ものまね」から動きを学ぶ段階。</p>
【練習期】	<p>動きをからだで覚える時期</p> <p>「導入期」の約1週間を経て、「Let's Go!! いいことあるさ」の歌詞と動きの意味を子ども達に伝え、イメージの共有化を図る。</p> <p>動きについては、そのイメージをもとに動作を「まね」ることを中心に据えて動き出しに入る。</p>	<p>【動きに対する声かけ】</p> <p>この段階では子ども達が各動作をイメージしやすい言葉に変換しことばかけを行なった。</p> <p>【子どもに対する声かけ】</p>	<p>【子どもたちの反応・変化】</p> <p>振り付けを覚える感覚で一緒にからだを動かしている。</p> <p>動きの順番の前後や左右が分からなくなりがちのため、動作への意識は高いものとは言えない。隣や周囲の友達を見て動く傾向にある。</p> <p>段階を経てひとつひとつの動きを習得していく。</p> <p>【作品の変化】</p> <p>ひとつひとつの動きを丁寧に覚える段階。</p>
【習熟期】	<p>習熟期</p> <p>円隊形で音楽にあわせて踊る段階に入る。</p> <p>フレーズごとに区切って練習する。</p>	<p>【動きに対する声かけ】</p> <p>動きに対する具体的な声かけは控えるようつとめた。</p> <p>【子どもに対する声かけ】</p> <p>どうしたら動きを思い出せるかについて子どもたちの意見を聞く。</p> <p>⇒声をだしてみんなで思い出す。</p> <p>音楽を聴いて思い出す。など</p>	<p>【子どもたちの反応・変化】</p> <p>自分の感覚や記憶をたどるといった現象がみられ始める。動きの習得に個人差が出てくるようになる。</p> <p>ことばかけよりも音楽・リズム自体に反応するようになる。</p> <p>【作品の変化】</p> <p>円隊形が慣れないせいか動きに集中できない、周りの友達が気になりきよきよろするといった傾向がみられる。</p>

【変化期】	<p>変化期</p> <p>ほとんどの子どもが動きをマスターする。「覚えている」という自信・もしくは安心感からなのか、からだの動かし方、表情などに余裕がみられ始めた。</p>	<p>【動きに対する声かけ】</p> <p>動きにメリハリがつくように声かけをする。</p> <p>【子どもに対する声かけ】</p>	<p>【子どもたちの反応・変化】</p> <p>①からだの緊張がとける(自然な笑顔が出始める)</p> <p>②自信を持って動くことができる</p> <p>③動き方に種類(強弱、高低、速い遅いなど)があることを覚える</p> <p>④からだにリズムが浸透し始める(リズムにからだは反応する、リズムと動きがシンクロする)</p> <p>⑤自分の動きが出てくる</p> <p>⑥歌詞を自分のことばで理解する(動きのイメージ化につながる)</p> <p>⑦歌詞を口ずさむ(歌を歌いながら踊る、Ohのところでは「オー」の掛け声を出す)</p> <p>⑧子ども同士で教えあう、少人数で動いてみる(例:どちらが高くジャンプできるかなど)</p> <p>⑨動きに対して、子ども達の発言が増えてくる(手のきらきらの動きはお星さまみたくするなど)</p> <p>【作品の変化】</p> <p>ころ・きもち・からだの統制が取れ始め、作品にも大きな変化がみられ始める。</p>
【発表段階】	<p>これまでの練習の成果を発表する段階</p> <p>通し練習を中心として行なう。</p>	<p>【動きに対する声かけ】</p> <p>動きが小さくなりがちなど、大切なキッカケのところだけ、声をかけるよう心がける。</p> <p>【子どもに対する声かけ】</p>	<p>【子どもたちの反応・変化】</p> <p>リズムをからだで感じる。</p> <p>動きがダイナミックになる。</p> <p>掛け声を合わせる。</p> <p>歌を口ずさみながらリズムダンスに取り組む(一部)</p> <p>周りの友達を感じながら、もしくは意識しながらダンスを踊るころはできる(一部)</p> <p>表現方法に差異がみられるようになった。</p> <p>【作品の変化】</p> <p>原案の作品をベースに、練習を積み重ねていきながら子ども達の自然な動きがプラスされる。ジャンプのタイミング・高さ・跳び方、掛け声、歌を口ずさむ、リズムの取り方など…内容に深みが増した。</p>

定していなかった表現方法が加わる。また、動きに対して、子どもたち独自のことばでの発言が増えるようになった。例えば、ジャンプのときはかえるみたいに跳ぶんだよ、手のきらきらの動きはお星さまみたいにスーパー（速く）でなど。共通の動きの中で、個人によってイメージやとらえ方が異なることが明らかとなった。

【コミュニケーション】

時に競い合う（ジャンプの高さ、手をぐるぐる回す動作の速さなど）、子ども同士で教え合う、少人数で揃えて動くなどリズムダンスを共有しながらのコミュニケーションが可能となった。

その結果、動作という側面では特徴が顕著に表れるようになり（高低、速い遅い、強弱などの調整を体感する）、表現という側面では「声を出す」「歌を歌う」という活動が新しくプラスされる結果となった。

また、リズムダンスには以下の六つの特性があると考えられる。

- ① ところやからだをほぐす
- ② リズムを感じて踊る楽しさ
- ③ 幼児主体の活動が展開しやすい
- ④ 動きからイメージを引き出しやすいもしくはイメージから動きだしがしやすい
- ⑤ ダンスという空間を共有しながら他者（友達）とコミュニケーションして踊ることの楽しさ
- ⑥ 個々人特有の表現方法を引き出す

4. 考 察

本研究は5～6歳児を対象にリズムダンスの実践を通じて、子どもたちのダンスの取り組みを参与観察し、その結果からリズムダンスの特性を明らかにしたうえで、リズムダンス～表現活動への手がかりを検討することを目的として行われた。

その結果、1)リズムダンスには以下の六つの特性があることが明らかになった。

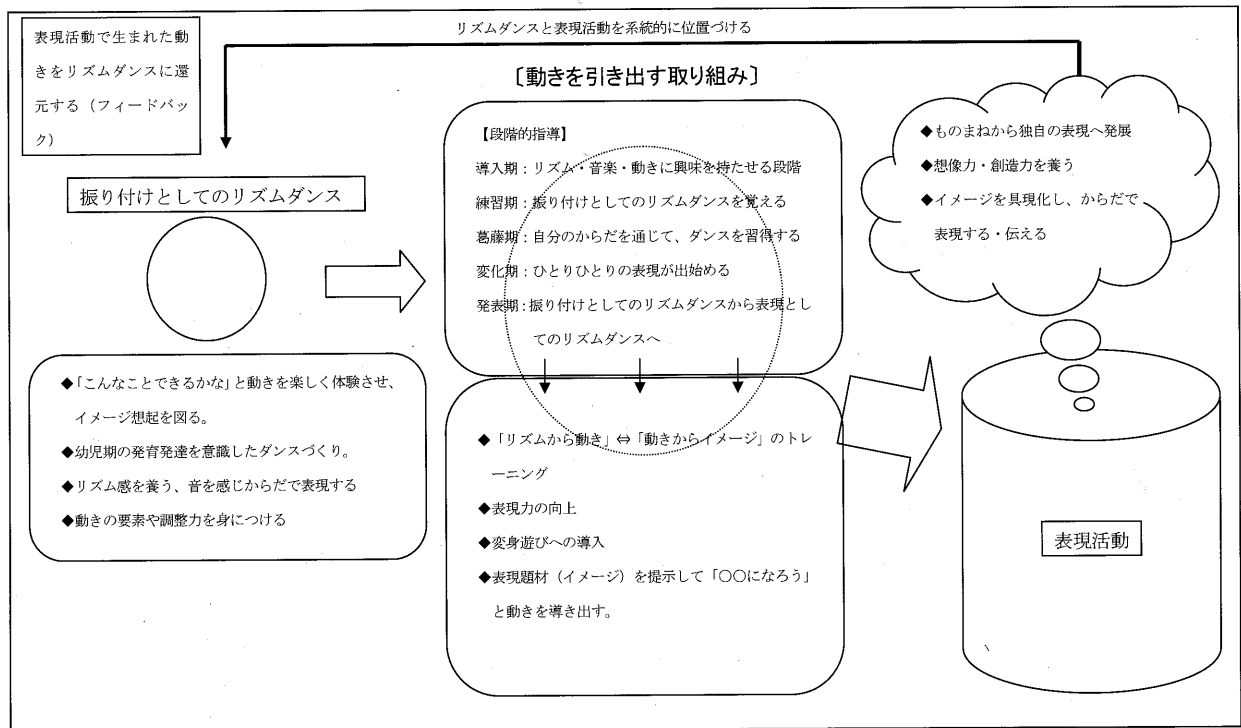
- ① ところやからだをほぐす
- ② リズムを感じて踊る楽しさ
- ③ 誰もが主人公（幼児主体）となって活動が展開しやすい
- ④ 動きからイメージを引き出しやすい、もしくはイメージから動きだしがしやすい
- ⑤ ダンスという空間を共有しながら他者（友達）とコミュニケーションして踊ることの楽しさ（リズムか介したコミュニケーション）
- ⑥ 個々人特有の表現方法を引き出す

また、2)リズムダンスを導入し、子どもたちが動きを習得するまでの過程を「導入期⇔練習期⇔葛藤期⇔変化期⇔発表期」の5段階に分類することができ、動

きやリズムを習得するための流れがあることが明らかとなった。

特に、「練習期」の中でベースである動きの写しが終了し「葛藤期」へさしかかると、踊り手である子どもたちには自分の感覚や記憶をたどりながら踊る（リズムや音楽を気にせず、確かめながら踊る）といった現象が見られはじめる。また、動きに対する個人差もこの頃から見受けられる。「練習期」に比べて動きが小さくなる、移動の範囲が小さくなるといったように運動量は低下傾向を示すが、この「葛藤期」こそが自分のからだにリズムや動きをしみ込ませる大切な時期と考えられる。なぜなら、子ども自身が与えられた動きを自分のからだを通し（自己との対話）、音やリズムを感じながら自己流にアレンジ（習得）し、その結果、各個人の踊り方として表出されるからである。

「葛藤期」での経験を蓄積し「変化期」に入る頃には、子どもたちには①からだの緊張がとける（自然な笑顔が出始める）、②自信を持って動くことができる、③動き方に種類（強弱、高低、速い遅いなど）があることを覚える、④からだにリズムが浸透し始める（リズムにからだ反応する、リズムと動きがシンクロする）、⑤自分の動きが出てくる、⑥歌詞を自分のことばで理解する（動きのイメージ化につながる）⑦歌詞を口ずさむ（歌を歌いながら踊る、Ohのところ「オー」の掛け声を出す）、⑧子ども同士で教え合う、少人数で動いてみる（例：どちらが高くジャンプできるかなど）、⑨動きに対して、子ども独自のことばでの発言が増えてくる（手のきらきらの動きはお星さまにするんだよなど）といった変化が見られ始める。振り付けが事前に用意されているリズムダンスにおいては、動きの流れを習得するという過程を経てリズムと動きがシンクロする。その様子はまさに「小さな子どもが音楽を聴いて自然に飛び跳ねる姿は、音に対する「身体のリズム」がそのまま動きになっているように見える」¹⁰⁾ のであり、「子どもは、単に聴覚を通してのみ音楽を吸収するのではなく、からだ全体で感じ取ることができる」¹¹⁾ 存在であるといえよう。別の視点から見ると、「リズムダンスの学習では、どんなリズムの音楽を取り上げるかが学習内容のめやすとなり、選曲は授業作りのカギとなる」¹²⁾ といえる。リズムカルに動きやすいアップテンポのリズム、子どもたちが身近に接しているアニメやヒット曲を用いる（思わず口ずさんで動けるような曲）、歌詞の内容がイメージしやすいもの（共感）、季節や生活に密着した身近な曲などを活用しながら、「音楽・リズム⇔イメージ⇔動き」を融合させ、子どもの世界観に近づきながら表現の世界への切り口を広げることが必要と考えられる。村田・松本の報告¹³⁾によれば、幼児期の子どもは「音楽



[一斉指導].....[個人/自由指導]
 [繰り返し].....[発展]

図3-1 リズムダンスから表現活動への流れ

に即座にからだが生きた反応し、子どもは耳ではなく、からで音楽を聞いているように思われた。音楽は、子どものからだに直接響いて、保育者の言葉がけ以上の影響力を持っており、さまざまな環境との関わりの中でもリズムやイメージを誘発し動きの世界をつくる一番大きな要因である」と幼児期における音楽の有効性を主張している。また、高野・小田¹⁴⁾の実践では、変身遊びとして「風船」を題材に選び授業実践する中で、時間の経過とともに「『今度はどんな形の風船を作りたい?』と指導者が尋ねても、子どもたちからの反応がなかった。風船は丸い形のイメージが強く、他の形には発展しにくい題材であったと考えられる」というように、表現活動の題材選びや指導言語の難しさについて明らかにしている。

リズムダンスの導入によって、「導入期～発表期」までの5段階の流れの経験が蓄積された結果、振り付けとしてのリズムダンス（原案）の範囲を乗り越えて、個々人特有の表現が現れ作品にも深みが増したと考えられる。では、一歩進めて表現活動を展開する際には何が大切になってくるのだろうか。上月¹⁵⁾は一人ひとりの表現を个性的に磨いていくためには、「単純に『できないのも個性』としてしまうのではなくすべての子どもに『同じようにできる』という前提を保障しなければなりません。『共通性』が保障されたときに初めて、一人ひとりの『個性的な表現（異質性）』が顕現さ

れる」としている。また、磯田¹⁶⁾は「跳び箱は跳べないが、数学が得意だと言うようなことがあたかも個性であるかのように、形式的なレベルでとらえることは誤りであり、どの子も跳び箱が跳べ、また数学ができるけれども、その跳び方や考え方に現れる（単なる上手・下手、あるいは飛ぶのが速い、遅いではない）一人ひとりの持ち味こそが個性的なのである」と述べている。

つまり、ことばや知能、からだが発達段階にある幼児期においては、リズムダンスという「共通性」を前提としてからだの中にある感覚的なリズムを呼び起こし、リズムから表現・イメージをつかむこと、またそこから発展して表現活動の中でイメージから動き・表現を生み出す流れが重要になるのではないだろうか。そして、リズムダンスと表現活動に関連性をもたせ、系統的に位置づける学習体系の中でその経験を増やしていくことが表現する力、自分のからだを動かす能力を身につけ育むことにつながると考えられる。感情やイメージ、からだの動かし方など総合的な経験値が少ない幼児期にはリズムダンスで経験値を増やし、表現活動につなげることが必要となる。また、表現活動で出てきた動きをリズムダンスに還元するなど、系統立てたダンスプログラムの提案が求められる。

5. ま と め

本研究において検討した結果をまとめると、以下のように整理することができる。

1. リズムダンスには「①こころ・からだほぐし、②リズムを感じて踊る楽しさ、③幼児主体となつての活動が展開しやすい、④動きからイメージを引き出しやすい、もしくはイメージから動きだしがしやすい、⑤ダンスという空間を共有しながら他者（友達）とコミュニケーションして踊ることの楽しさ、⑥個人特有の表現方法を引き出す」の六つの特性が認められた。
2. リズムダンスを導入し習得していく過程は「①導入期、②練習期、③葛藤期、④変化期、⑤発表期」の5段階に分類することができる。特に③葛藤期では音やリズムを感じとりながら子ども自身が与えられた動きを自分のからだを通して（自己との対話）自己流にアレンジ（習得）する。この経験の蓄積が振り付けとしてのリズムダンス（原案）の範囲を乗り越えて、個人特有の表現が現れる作品にも深みが増すと考えられる。
3. 振り付けが事前に用意されているリズムダンスにおいては、動きの流れを習得するという過程を経てリズムと動きがシンクロし、個人特有の表現を引き出す。リズムダンスで取り上げられる音楽は、子どものからだに直接響きリズムやイメージを誘発し動きの世界をつくる一番大きな要因になるといえる。
4. リズムダンスという「共通性」を前提としてからだの中にある感覚的なリズムを呼び起こし、リズムから表現・イメージをつかむこと、またそこから発展して表現活動の中でイメージから動き・表現を生み出す流れが重要である。リズムダンスと表現活動に関連性をもたせ、系統的に位置づける学習体系の中でその経験を増やしていくことが表現する力、自分のからだを動かす能力を身につけ育むことにつながる。

引用・参考文献

- 1) 村田芳子, 松本昌代: 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第21号, p.22 (2004).
- 2) 正木健雄: 子どものしあわせ. 日本子どもを守る会. 草土文化 (2007.5).
- 3) 子どものからだど心白書 2006: 子どものからだど心・連絡会議. 子どものからだど心白書 2006・編集委員会 (2006).
- 4) 正木健雄: 子どものしあわせ. 「子どもの体力は、

低下している?」日本子どもを守る会. 草土文化, p.9 (2007.5).

- 5) 正木健雄: 子どものしあわせ「子どもの体力は、低下している?」. 日本子どもを守る会. 草土文化, p.10 (2007.5).
- 6) 高野牧子: 幼児と保護者を対象とした身体表現の指導構造—LABAN「MovementPlay」コースでの観察調査をてがかりにして—. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第23号, p.52 (2006).
- 7) 西 洋子: 幼児のこころとからだを育てる表現遊び〜『いま・ここ』と『あした』をつなげる〜. 女子体育, 47 (7-8), 46 (2005).
- 8) 上月智晴: すべての子どもに身体で表現する喜びを. 季刊保育問題研究, 225号, p.13 ().
- 9) 高野牧子, 小田ひとみ: 幼児への創造的身体表現の指導法. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第20号, p.26 (2003).
- 10) 村田芳子, 松本昌代: 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第21号, p.24 (2004).
- 11) 浜中康子: リズム反応. 子どもと音楽第2巻, 子どもの発達と音楽. p.117, 同朋社. (1987).
- 12) 村田芳子, 松本昌代: 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第21号, p.38 (2004).
- 13) 村田芳子, 松本昌代: 生涯学習に向けた「リズムダンス」・「現代的なリズムのダンス」の学習指導に関する縦断的研究. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第21号, p.29 (2004).
- 14) 高野牧子, 小田ひとみ: 幼児への創造的身体表現の指導法. (社)日本女子体育連盟学術研究, 第20号, p.30 (2003).
- 15) 上月智晴: すべての子どもに身体で表現する喜びを. 季刊保育問題研究, 225号, p.15.
- 16) 磯田一雄: 授業の原理を求めて. 教育出版 (1997).
- 17) 坂本 桂: 子どものことを知らなければよい授業はできない. たのしい体育・スポーツ. 学校体育研究同志会1月号. (有)創文企画, pp.6-11 (2006).
- 18) 口野隆史: 幼年期の発達とめざす力—面白い・楽しい遊び体験を通して—. たのしい体育・スポーツ. 学校体育研究同志会1月号. (有)創文企画, pp.24-27 (2006).
- 19) 中森孜郎: 「体力向上」政策の批判的検討. たのしい体育・スポーツ. 学校体育研究同志会2月号. (有)創文企画, pp.12-19 (2006).
- 20) たのしい体育・スポーツ. 学校体育研究同志会8月号, (有)創文企画 (2006).
- 21) 久保 健, 高橋和子, 三上賀代, 進藤貴美子, 原田奈名子: 「からだ」を生きる—身体・感覚・動きをひらく5つの提案. 創文企画 (2001).
- 22) 宮下充正: 子どもの身体活動能力と教育. 子どもと発育発達. 日本発育発達学会編, Vol. 4, No. 1, pp.45-51, 杏林書院 (2006).
- 23) 小田ひとみ: 幼児と表現運動の発達〜 “ややこし

- や〜”の動きをもとに〜。子どもと発育発達。日本発育発達学会編, Vol. 2, No. 2, pp. 131-133, 杏林書院 (2004).
- 24) 日比野幹生: 子どもの体力向上に向けた取り組み。子どもと発育発達。日本発育発達学会編, Vol. 2, No. 5, pp. 309-314, 杏林書院 (2004).
- 25) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(2), (2006).
- 26) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(2), (2006).
- 27) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(3), (2006).
- 28) カレン・フリーンホフ: ダンスを作っていく方法と教師の姿勢。(社)日本女子体育連盟, 女子体育, 47(4), pp. 6-9 (2006).
- 29) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(5), (2006).
- 30) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(7-8), (2006).
- 31) (社)日本女子体育連盟: 女子体育, 47(10), 10-13 (2006).
- 32) 細川江利子: 動きを捉える目。(社)日本女子体育連盟, 女子体育, 47(10), 10-13 (2006).
- 33) 本山益子, 西 洋子: 幼児期の身体表現の特性Ⅱ—身体表現と認識の関連—。舞踊學, 第23号, pp. 53-64, 舞踊学会 (2000).
- 34) 村田芳子, 高橋和子: バリアフリーなこころとからだのふれあいを求めて—幼児から高齢者までを視野に入れたダンス指導の実際—。(社)日本女子体育連盟学術研究, 第22号, pp. 1-16 (2005).
- 35) 七類誠一郎: ダンスの魂。文芸社 (2006).
- 36) 柴 眞理子: 身体表現〜からだ・感じて・生きる〜。東京書籍株式会社 (1993).
- 37) 三浦雅士: 考える身体 The Body Thinking. NTT 出版 (2001).
- 38) ルドルフ・ラバン・神沢和夫訳: ラバン身体運動の習得。白水社 (1985).
- 39) 村上史郎, 高杉自子, 今井和子, 後藤節美, 田中泰行, 渡辺英則: 発育に合わせて援助する保育とは。株式会社フレーベル館 (1997).
- 40) 全国保育団体連絡会・保育研究所: 保育白書 2006。ひとなる書房 (2006).
- 41) 淡島富久: 保育の原点を求めて 木内鳩の家幼稚園 60年のあゆみ (1990).
- 42) 岸井勇雄, 無藤 隆, 柴崎正行: 保育内容・表現。同文書院 (2006).
- 43) 日本幼年教育研究会: 5歳児の保育の展開。明治図書出版株式会社 (1991).
- 44) 現代と保育 Vol. 68, ひとなる書房 (2007).
- 45) 水野伸子: 幼児の遊びと音楽・繰り返しの視点からみた楽しさの一考察。保育の研究, No. 18, pp. 65-73 (2001).
- 46) 諏訪きぬ, 土方弘子: 5歳児の発達と「保育の質」—長期間保育児と短期間保育児の発達上の差異をめぐって—。幼児の遊びと音楽・繰り返しの視点からみた楽しさの一考察。保育の研究, No. 18, pp. 65-73 (2001).
- 47) 黒川健一: 保育内容「表現」。ミネルバ書房 (2004).